

introduction

超音波診断装置の性能が良くなり、一般的な機種でも簡単に良好な画質が得られるようになりました。日常の運動器診療で使用されている方々も多いのではないかと思います。特に私の専門とする足では皮下組織が薄く、より鮮明に解剖学的なランドマークを描出できます。さらに靱帯の質的評価や不安定性の診断ができ、また神経や血管の走行などがわかります。また、パワードプラ法を用いれば新生血管血流が容易に判定でき、痛みを伴う病変部分を可視化できます。

超音波ガイド下インターベンションに関しては、神経ブロックやハイドロリリースなどの注射を用いた手技は種々の方法が開発され、日常診療で頻用されるようになりました。しかし、超音波ガイド下・アシスト下手術は、まだ始まったばかりです。ただ関節鏡をみても、現在では関節鏡視下手術はすべての関節で普通に行われる時代になっていますが、関節鏡もはじめは検査のためのデバイスでした。関節鏡は腔のある部分では良好な視野が得られますが、腔のないところでは腔を作る必要がありますし、腔の後ろに隠れている神経は見えないために、合併症として時に神経損傷を招くことがあります。それに対して超音波では腔は必要ありませんし、神経も比較的容易に同定できます。合併症としての神経・血管損傷を避けつつ低侵襲で手術できるところは、関節鏡にはない利点です。時に関節鏡と超音波を併用することにより、より安全に手術ができるようになると思います。本特集を組むにあたり、超音波ガイド下・アシスト下手術で必要数の項目が集まるかどうか心配しておりましたが杞憂に終わり、私の専門とする足をはじめ下肢だけで十分な数の素晴らしい論文を寄稿いただくことができました。日本国内でさまざまな取り組みが行われていることがわかり、これらが世界に普及する日も近いと確信しております。この特集をヒントにいただき、若い先生が中心となりさまざまなアイデアを生み出していただき、この分野をさらに活性化させていただければ幸甚に存じます。

奈良県立医科大学整形外科

田中康仁